

## 今月のみことば 2018年10月

**「見よ、主の目は主を恐れる者に注がれる。主の恵みを待ち望む者に。」**

**(詩篇33篇18節)**

神を恐れることは知識の初めである、と聖書は言う(箴言1章、詩篇111篇など)。「恐れ」という聖書の原語は、恐怖とか怯える、という語感に近く、多くの聖書翻訳が「畏敬」「尊敬」という、ソフトな言い方に変えてしまっているのは、適切ではない。

生きるか死ぬか、という恐怖を味わった人は、生かされていることの恵みを初めて知る。大魚に呑まれた預言者ヨナは、恐怖におののいて悔い改め、一命をとりとめた。その後、今度は神のみこころに従って、強大な敵国アッシリアの首都ニネベに赴き、ヨナの宣教によってそれまでの恐るべき罪を悔い改め、滅びを免れた。



宮廷で仕えたイザヤは、繁栄に奢るエルサレムに「わざわいなるかな」と六回もその罪を弾劾した。ところが神殿で神ご自身の聖なる威光にふれると、自分こそわざわいであることを悟り、死の恐怖におののいた。しかし自分の罪を認めし、悔い改めると、神はただちにイザヤを預言者として召し、救いのメッセージを託されたのであった。

現代は「神に対する恐れがない」(ローマ3:18)時代である。

それどころか、天災(英語では Act of God「神の行為」と言う!)があると、神が愛なら、なぜそれを止めないのか、と神を非難する始末である。

2011年3月11日、東北地方は巨大津波によって壊滅的な打撃を受け、多くの人命が失われた。ケセン語(東北の気仙地方の方言)に新約聖書を翻訳した医師でありクリスチャンの山浦玄嗣氏のもとに、報道関係者が殺到した。そして口々に同じことを尋ねた。

「神さまは東北の勤勉で立派な人々を、いったいなぜこんなむごい目に遭わせるのか。あなたは信仰者としてどう思いますか」と。



けれども、この震災のさなか何千人という人々を診て、一緒に涙した山浦氏は、「なして、おらアこんな目に遭わねアばなんねアんだべ」という恨み言を聞いたことは一度もない。東京の人はなんで同じことを考えるんだろう」と不思議に思ったそうである。



同級生仲間と何人かで集まったときにその話をしてみたところ、出た結論は「暇だからでねアが?」ということであった、という(「3・11後を生きる『なぜ』と問わない」p.48)。

聖書によれば、神は私たちの理解をはるかに超えた存在である。私たちの狭い見や神学で捉えることができるわけではない。しかし、ただ一つ言えることがある。神は愛であられた。たとえ私たちに理解できないことがあっても、最終的に、私たちが神の正しさと栄光を讃えざるを得ない結末にすべてを導かれる、ということである。いやむしろ、神は愛であるからこそ、地上の生にしがみついた私たちを揺さぶり、神に対する健全な恐れを目覚めさせて、永遠の御国に私たちを導こうとしておられるのではないだろうか。ヨナもイザヤもその使命を託されたのである。